「原文」　第一章　寒風新宿追分（おいわけ）

寒さに目を覚ました坂崎磐音は夜具（やぐ）の中で身を縮めた（ちぢめる）。すると腹の虫がくうっと鳴いた（なく）。

米も味噌もそこをついて二日が過ぎた。

（何とかせねば）

と煎餅（せんべい）布団の中で考えたが知恵は浮かばない。

明和（めいわ）九年は、この年の十一月十六日に安永（あんえい）元年（がんねん）に改元（かいげん）された。

理由は二月の目黒（めぐろ）行人坂（ぎょうにんざか）の大火（たいか）や相次ぐ凶作を振り払って、人心を一新するためであった。

だが、 深川（ふかがわ）六間堀（ろっけんぼり）の金兵衛（きんべえ）長屋（ながや）に独り住む坂崎磐音のもとには、明るい知らせは何も届かなかった。

（寝ていても仕方がない、起きよう）

そう決心した磐音は、夜具から這い出た。

ぴくりと肩の傷が痛んだ

一月前、両国橋（りょうごくばし）で天童赤司（てんどうせきじ）との闘争（とうそう）で受けた刀傷（とうしょう）はほとんど癒えていたが、ただひとつの稼ぎ、宮戸川（みやとがわ）の鰻割き（うなぎさき）の仕事に戻るにはまだ手が利かなかった。引っ掛かりがあり、微妙な感覚が戻ってこないのだ。

磐音は部屋の隅に夜具を畳む（たたむ）と手ぬぐいをぶら下げて井戸端（いどばた）に行った。すでに長屋の男たちは出かけていた。

九尺二間（くしゃくにけん）の金兵衛長屋に住人は、棒手振り（ぼてふり）や職人たちばかりで、浪々の身（ろうろうのみ）は坂崎磐音ただ一人だ。

「旦那、怪我はまだ治らないのかい」

水飴売り（みずあめうり）の五作の女房おたねが、亭主（ていしゅ）の黄ばんだ越中（えっちゅう）褌（ふんどし）を洗いながら聞いた。

「もう大丈夫だが、うなぎ割きは結構手先が敏感でなければならぬゆえ、あと三、四日はかかろうな」

宮戸川の鉄五郎（てつごろう）親方からは

「仕事はいいから朝餉（あさげ）だけでも食べにこなせえ」

という言付け（ことづけ）をもらっていた。

朝の間だけ一刻（二時間）から一刻半の鰻裂きで七十文（もん）の手間賃に朝餉、これが宮戸川との契約だった。だが、仕事はまだできないのに飯だけ食べに行くのも心苦しかった。

磐音は顔を洗ったついでに、腹の足に水を飲んだ。が、昨日から口にするのは水ばかりで、一口飲んでやめた。

「坂崎さん」

声に振り向くと、北割下水の貧乏御家人（ごけにん）の次男品川柳次郎が長屋の溝板（どぶいた）の上に立っていた。

「品川さん」

このところどちらも職に就いていてなかった。

顔を見れば、この日の首尾も推測がついた。

「磐音さんも腹一杯、飯を食べた様子はないな」

柳次郎さんはなんとも情けないことを言った。

磐音は、

「腹がたぶたぶと音を奏でて風流です」

と力なく笑った。

「呆れたね、お前さんたちには」

おたねが苦笑した。

二人は切迫感がないのは、独り身だからだ。

「これから内藤新宿に行きませんか」

「何ぞ仕事の口がありますか」

「それを探しに行くんです」

甲州（こうしゅう）道中の一つの宿、内藤新宿は、日本橋と高井戸宿の四里（り）の間に元禄（げんろく）十一年に開設された。だが、当時は人の往来や物産の流通も少ない上に飯盛旅籠（めしもりはたご）ばかりが繁盛したので、幕府は、享保（きょうほう）三年に廃止した。

その後、江戸の町の拡大に伴い、内藤新宿の重要性が増した。そこで、五十余年ぶりに再興（さいこう）されたばかりだった。

「半年前に内藤新宿の許しがでたというので、女衒（ぜげん）や博奕（ばくち）打ちたちがどっと入り込んで、遊び場所を建て、賭場（とば）を開いているらしい。御府内より仕事が見つけやすいと、仲間が知らせてきたんですよ。坂崎さんも同道しませんか。」

「深川から通えますか」

「二里はたっぷりありますから、通うのは無理でしょう。だが、坂崎さんも、俺も、当座の仕事が見つけないと飢え死に（うえじに）だ。ともかく、荒稼ぎ（あらかせぎ）の仕事を得ることです。」

品川柳次郎はあてがある様子で、何日か泊まりこみになると言った。

「今、支度します」

磐音は長屋にとって返すと古びた袴（はかま）を身につけ、備前包平（びぜんかねひら）二尺七寸と無銘（むめい）の脇差（わきざし）一尺七寸三分（ぶん）を腰に差した。すると久しぶりの大小（だいしょう）が腰に鉛でも下げたように重く感じられた。

空きっ腹で内藤新宿まで歩けるだろうかと、磐音の頭を不安がよぎった。

「おまたせしました」

柳次郎と肩を並べて木戸口（きどぐち）を出ようとすると。

「おや、二人して何ぞいい話かね」

と大家の金兵衛がどてら姿で立っていた。

「金兵衛どの、内藤新宿に仕事探しに参る。戻った暁にはきちんと家賃は支払いますぞ」

「内藤新宿といやあ、朱引（しゅびき）の外かね」

金兵衛は江戸市中の外かと言った。

「ちぇっ、内藤新宿は立派に朱引内だぜ」

江戸育ちの柳次郎が答え、

「大家どの、あてにしてていいぜ」

と言葉を継いだ。

「そんなとこまで行くこたないとおもうがね」

二人は金兵衛の言葉に見送られて、六間堀町からお籾倉の脇を通り、新大橋（しんおおはし）を渡った。

「食いませんか」

柳次郎は懐から紙包みを出して広げた。

白い粉を吹いた乾燥芋だ。

「おお、これはうまそうだ」

蒸した薩摩芋を乾燥させると糖分が増して、空腹の磐音には、（なんとも美味…）

だった。

「母上が拵えたんです」

柳次郎の言葉はいつになく優しく響いた。

「これでなんとか歩けそうだ」

新大橋を渡ると大名屋敷沿いに日本橋川へ出た。次いで御城（おしろ）に向かって西に進む。魚河岸（うおがし）を抜けて日本橋で東海道に入った。

若い二人の足が早い。

数寄屋（すきや）橋御門外から虎御門外、赤坂御門溜池（ためいけ）から四谷（よつや）御門と、城を右回りに半周して、四谷大通りに出た。

通りにそって町屋が薄く伸びて、その背後には御先手組（おさきてぐみ）の組屋敷などが広がっていた。そんな組屋敷からお店（たな）の小僧（こぞう）が風呂敷包みを背負って出てきたりした。

下級武士の家ではどこも内職をしていたために、小僧が羽子板（はごいた）の絵付き（えつき）仕事を集めて回っているのだ。

「体の具合はどうです、刀は遣えますか」

「三、四日前から、素振りはしています。引っ掛かりもなくなりましたから、もう大丈夫です」

「坂崎さんが頼りだからな」

柳次郎がぽつんと言った。

「何か仕事のあてがあるんですか」

「ここまで来たら、坂崎さんも嫌と言うまい」

磐音が柳次郎を見た。

「いえ、お上（おかみ）の定法（じょうほう）に触れるようなことではありません」

「なんです」

「まあ、喧嘩の助っ人（すけっと）です」

「助っ人？」

磐音が呆れて見た。

「４月に内藤新宿が再興されたについては、食売旅籠の主たちの要望がつよいんですよ。いえ、表立って、お上は食売の届を聞き入れてはくれません。そこで、駒場、四谷あたりに将軍家が御成（おなり）の時に御鷹（おたか）御用宿をつとめるという名目でお許しを終えたんです。むろん百五十人からの食売女が聞き届けられた裏には大金（たいきん）が動いています…」

柳次郎は事情に精通していた。

行く手（ゆくて）に大木戸が見えてきた。

「あの木戸口から下町、中町、上町と、東西九丁十間、南北一丁足らずが新宿です。中町に太宗寺（たいそうじ）があるんですが、この門前の縄張りをめぐって、四谷大木戸の金貸し（かねかし）の黒木屋左兵衛と上町の渡世人（とせいにん）の新場（しんば）の卓造が張り合っていましてね、双方が助っ人を集めているのです」

「喧嘩になりそうなののですか」

「さあね、私の勘では血の雨が降るほどの出入りにはならないでしょう」

磐音と柳次郎は元和（げんな）二年に設けられた大木戸に差し掛かった。もともと、大木戸は江戸城下への入り口という意味だから、金兵衛がその外の内藤新宿を朱引の外というのも間違いではない。

道の両側に石垣が積まれ、番屋があった。辻駕籠が客待ちし、馬が荷を積んで往来していた。

「うろんなものたちを宿場にあつめるのを、お上がよくだまっておられますか」

「坂崎さん、そのうろんなものがわれらです」

「そうか、そうでしたね」

「こんなことでもないと一日二文はもえません」

「えっ！一日二文にもなるのですか」

「左兵衛と卓造の双方が腕のいいものを競い合って、手間賃が二文まで高騰したと、新八がしらせてきたのです」

安東新八は柳次郎同様、貧乏御家人（ごけにん）の三男坊で、磐音とも知り合いだ。

「安藤さんはどちらについておられます」

「新場の卓造一家に身を寄せているそうです」

「我らもそちらに参りますか」

「まずは様子を見てみましょう」

二人の行くとおりの左右では、旅籠なのか、大工（だいく）が入って仮普請（かりぶしん）のところもあれば、すでに食売女が格子もない板の間から手招きしているところもあった。

宿場の中程（なかほど）に普請中の建物は、どうや本陣と脇本陣のようだ。

もともと甲州道中を利用する参勤交代（さんきんこうたい）の大名家（だいみょうけ）は、内藤新宿のいわれになった高遠藩（たかとおはん）内藤家、飯田藩（いいだ）、高島藩と限られ、あとは甲府勤番や八王子千人同心くらいだった。それが立派な本陣が作られていた。